



社会福祉法人友愛学園
広報誌 VOL. 46

発行日 令和6年3月31日
 発行人 社会福祉法人 友愛学園
 〒198-0001 東京都青梅市成木 2-107
 電話 0428-74-5453
 F A X 0428-74-6906
<https://www.yuaigakuen.or.jp/>



題字 学園創設代表者 元理事長 実川 博 書

感じる力と意見表明

理事長 河津 英彦

令和6年は思いもかけぬ幕開きになった。元日に能登半島地震が起こり、2日には羽田空港で被災地に物資を運ぶ海上保安庁機に旅客機が衝突炎上する事故が生じた。

海外ではウクライナとパレスチナ・ガザ地区の戦争が続いている。戦争は最大の人災である。中井久夫は言い、精神科医でありながら戦争をテーマにした論文執筆や講演も行っていった。今年の世界の半数の国で大統領選挙等が行われる選挙イヤーでもある。新型コロナウイルスの危機は遠のいてきたが、現にある世界の危機が首脳部の交代に伴ってどのように姿を変えていくのか予断を許さない。

さて、国内では「こども基本法」ができてまもなく1年になる。その具体化を目指す「こども大綱」の公表は秋ごろの予定が遅れて12月22日になった。こども基本法では第3条に基本理念が6つ掲げられている。その中に「すべてのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、自己に直接関係するすべての事項に関して意見を表明する機会及び多様な社会活動に参画する機会が確保されること(第3項)」「すべてのこどもについて、その年齢及び発達の程度に応じて、その意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されること

(第4項)」が謳われている。

この動きと並行して児童福祉法の改正も行われ(令和6年4月施行)主な改正事項4点の中に「子どもの意見を聴き取り組みの実施・強化が児童相談所における措置の各段階で行われること」が入った。

東京都児童福祉審議会は昨年1月「児童相談所が関わる子供の意見表明を支援する仕組み(子供アドボケイト)の在り方について」という知事あての提言を行い、子どもの意見表明を支援する「意見表明支援員」の導入が記載されている。

児童福祉法でいう「すべてのこども」には、乳幼児や障害児、外国籍の子も含まれる。子どもは様々な思いをもっているが、どのように表現すれば伝わるか、正確な言語化はたやすいものではない。そのためにも日々の生活における子どもの行動を意見表明として傾聴する大人(職員)の態度が前提になる。対話による利用者との関係づくりはそこから始まる。

1. 沈黙と言葉

若い頃、読んだ本の中に、スイスの哲学者M・ピカートの「沈黙の世界」がある。「もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまふであろう」「愛の中には言葉よりも多くの沈黙がある『黙って!あなたの言葉が聞こえるように』』という表現があり、言葉の存

在を認めながら沈黙の持つ意味を詩的に語っていた。

同じころ、都の研修担当として日本カウンセリングセンターにカウンセリング実習を依頼していた。自身はロジャースの始めたエンカウンターグループであり、場面構成はなく世話人のS先生は「皆さんの時間です。どうぞご自由にお使いください」とだけ言い何の説明も、技術指導もない。

福祉職場から集まった職員は驚き、不安、困惑が生じ、黙りこくったまま始まる。たまりかねて誰かが話しだし、かみ合わない会話が生じると時折、世話人が言葉の意味をどう理解したか介入する程度である。私も研修生に糾弾されることがあったが、1回3時間、12回のセットを3年間で6回体験した。その中で、黙っていても部屋の空気が凝縮しグループが一体となっている体験を幾度も味わっている。空疎な沈黙ばかりではない。充実した沈黙があることを知ってから、沈黙は怖くなくなった。間が持てるようになったのである。

映画監督の山田洋次は、若い頃「ローマの休日」を観て、王女と記者の甘いラブロマンスと馬鹿にしていたところ先輩の監督に怒られ、再度見に行つて気づいた事を語っている。ラストシーンの記者会見場で王女の公式発言の裏に隠された熱いささやき、王女が退場した後の空舞台、最後

にポケットに両手を入れて一人感慨に浸りながらゆっくり退場する記者。サイレントアップにもちゃんと言葉があることに気づかされたという。

2. 身体の障害と心の豊かさ

20年以上前の話になるが、声楽家の池田直樹は同じく声楽家である妻とピアノストの3人でボランティア活動を続けていた。府中療育センター内にある府中養護学校くぬぎ分教室の「お楽しみ会」は何年か続けていたが、初めての時に最も深い感動体験をしている。

演奏会場の体育館にはマットが敷かれ、医療器具がおかれ、一人ひとりに教師や看護師が付き添っている。子どもたちに喜ばれそうな選曲にも拘わらず、子どもたちの目は宙を見つめていたり、からだの反応を感じ取ることでできないまま、池田さん達は最後まで演奏の方向を失い動揺していた。ところが、そのあとの懇談会で思ってもみない報告を受けたのである。

「Kちゃんは、一生懸命聞いていて、瞬きが、いつもより多くてー」「Sさんは、自発呼吸の回数が増えてー」「Iちゃんは、からだをいつもより動かしてー」などそれぞれ担当教師から反応が伝えられていたところ、ある先生が次のような話を始めた。

「私のEさんが池田先生の歌を聞いていたら『手を振って』って言う

んです。それで手を振ってあげたら『もっと強く振って!』って」「どうしたの?」って聞いたら『わたしいまはげしくおどりたいの』って言ったんです」

Eさんは眼球と指1本を動かせるだけであり、ボードの50音を見るまなざしを教師は読み取っている。生まれたときから障害を背負い、一度も歩いたことのないEさんが激しく踊りたいほど高ぶり感じてくれたことは、今思い出しても鳥肌が立つほどの感激が蘇ってくる。池田さんは語っている。今日来てよかった! 本当によかったです!

このころ、東京都知事が府中療育センターを訪問し「この人たちに人格はあるのかね。ショックを受けた。自分の文学上の問題に触れてくる」と言う発言がマスコミの批判を浴びた。池田氏は、朝日新聞の「声」欄で「知事には見えないもの」という投稿を行っている(平成11年9月20日)。また、「声の力」河合隼雄、谷川俊太郎等(岩波書店)でもこの感動物験を語っている。当時の知事も、このような話しを伝えていれば理解に繋がったのではないかと、今の私には思える。

身体に障害があり、感情表出もうまくできなくても、感じる力は平等に持っている。あるいは、それ以上かも知れない。

3. 「いや」という意見表明

大学で准教授をしている竹端寛は娘の乳幼児期を振りかえっている。2歳前後の「いやいや期」は「叱られても同じ行動をする」「はしゃいで走り回る」「食べ物を投げたりこぼしたりする」親が迷惑に感じたり困ったりすることをあれこれ試してみる。しかし、お試し行動には確実に、娘の「意図」があったと気づく。自分が感じていることを適切な言葉で表現できないことは苦しい。泣いたり、怒ったり、物を投げたり、自分でできる行動で示すしかない。

「自己主張」は「意見表明」として受け取り、「絶賛自己主張期」と呼び変えるようにした頃から親子関係が変化してきたという。大人と子どもの関係に欠けているのは「自立性」と「対等性」である。テレビでアニメを見ている子に、注意したいことがあると本人の了解なしにテレビを消せば、子が怒るのは当然である。子どもは一方的にケアされる存在ではないし、子どもも大人も対等の人格なのである。「ケアシケアされ生きていく」「ちくまプリアー新書」

私は、理事長職の傍ら、友愛学園のみならず、他の知的障害児者施設や児童養護施設などの職員面接を何年にもわたって続けてきた。新任職員の戸惑いと利用者との信頼関係を形成していく過程にこれと同じような話を聴きとっている。

10年目のある職員は、先輩の指示には素直に動く利用者が、新任の自分には「いや」と言って動かない。「いや」には理由があることに気づかなかった。「いや」な時は少し待つというゆとりを持たなかった。とにかく日課通り進めなければという意識が先に立ち、悩みの連続だったという。現在は、後輩に動きたくない理由を考えるよう指導している。

また、ある施設の強度行動障害児棟の職員は2か月くらいまで利用者はよそよそしく大人しいが、自分をよそ者扱いにしていた。慣れてくると、試し行動や甘えが始まった。叩く、つねる、爪たてをする。係長にケータイで連絡するとすぐに来てくれた。1日に2、3回ヘルプを出していたが1年の終わりにヘルプ出しはほぼ無くなった。2年目の現在も3割くらいの辛さはあるが自力でやれるようになっていっていると語っていた。

利用者と職員は相互関係であり、一方的な「支援―被支援関係」ではない。しかし、ケアシケアされ生きていくことを、頭だけではなく身体で分かっている。経験の少ない職員の行動を未熟とか利用者を迎合するルール崩しと考える職場は退職者が絶えない。職員同士も素直にヘルプを出せ、気持ちよく手助けできること、利用者の言葉以前の思いを付度できるような職員育ちが施設運営の基本であると考えている。

成人部

令和5年度を振り返って

令和5年度は4月に施設長が代わり、そのことがあってか、つい昔のことを思い出す1年になりました。

私は平成18年4月に友愛学園に入職し、成人部に配属されました。支援員から指導職、そして管理職と立場は変わりましたが、成人部で18年勤務しています。18年間、一緒の時間を共有した利用者が数多くいますし、お別れした利用者、新たに出会った利用者もたくさんいます。

施設長が昔の話をすることがあったためか、私自身も利用者が元気な時の姿を思い出すことの多い1年でした。利用者は年齢を重ね、体調を崩すことが多くなっており、そのことは実感していました。ただ、なんだか利用者の『老い』を強く感じ、そのことを『淋しく』感じる自分があります。

この3年間は新型コロナウイルスの影響を受けました。日中活動や余暇活動、外出や家族との交流などさまざまな場面で、利用者だけではなく、ご家族の皆さんにも、さまざまな制限をお願いしてきました。それは利用者の笑顔の機会を減らすことになってしまいました。また、職員もマスクをして支援をしなくてはならなかったため、表情を使つてのコミュニケーションが難しくなり、利

用者の表情も乏しくなることに繋がってしまつたのではないかと感じています。

利用者が時間の中で、年齢を重ねて、老いていくのはある意味自然なことだと頭では理解していますが、今年は『淋しい』という感情が強く溢れる年でした。



令和5年度はさまざまなイベントが再開できました。再開したイベントに参加している利用者のうれしそうな笑顔、さまざまな表情を見ると私もうれしく、笑顔になります。イベントだけではなく、日々の生活の中で利用者と一緒に笑顔で過ごす時間を大切にしていき、前向きにかかわりたいと思っています。

(副施設長 矢野麻衣)



地域交流

令和5年度を振り返って

私の目の前を幾台もの車両が通過する。かと思えば、来たる青梅マラソンに向け、ランナー達も右に左にと車同様に走り去っている。

令和5年度の一大ニュースといえば、やはり地域交流プラザゆうあいの開所、青梅市西分町への移転である。私たちは12月19日に青梅市西分町に越してきた。伽藍洞であったプラザゆうあいは、机が運び込まれ、家電も買い揃い、サテライトSHOPも人目を引くように彩を加えた。今後、試行を繰り返しながら、多くの方々から期待される場にしていきたいと思う。



今年度はもう一つ大きな取り組みをした。それは「コロナ明け」である。まだまだ感染拡大の出来事や学級閉鎖の話なども珍しくないが、コロナ禍マインドからの脱却を強く意識し、支援した1年であった。

9月、利用者が4年ぶりに単独旅行に出かけた。場所は出雲市と松江市。出雲そばを堪能し、同じユニットの利用者だけでなく、職員にもお土産を持ち帰ってきた。そばが旨か

ったこと、新幹線、特急を上手く乗り継いだことを、束になった乗車チケットを見せながら説明してくれる。年末、嬉々とした口ぶりで年越しの恒例行事の再開を話す利用者。彼は大きみそかまで働き、そのまま都心に出かけ年を越す。「今年はそんなにいない、早く帰る」と言いながらも、実家跡地の状況を憂いでいる。

ごみは捨てられていたくない、草も生えていない方がよい。4月から実家の様子伺いを再開した彼は、定期的に除草剤を撒き、ごみの有無も確認していた。コロナ禍以前に戻った。2月、サテライト型住居を約3年にわたり利用していた女性が単身生活に移行する。18歳から法人のGHを利用していただ彼女は、ずっと同じ会社で働いている。サテライトに移ってからというもの、以前にもまして私は会う機会が減ったが、11月の学園祭では模擬店を手伝ってくれた。周囲に気を使い、タピオカに不慣れな私にも優しくレクチャーをしてくれる。強く安心した。



本当の意味でのプラザゆうあいの始まりは来年度から。次年度は報酬改定もある。でもコロナ禍を乗り切ったのだから：妙な自信がある。(プラザゆうあい施設長 宮崎啓太)

今年度の振り返り

令和5年度は、職員の入替わりがあり、大きな変化の中でのスタートでした。不安を感じることもあったと思いますが、職員は動じることなく、安定した支援を継続しています。

新型コロナウイルスが5類に引き下げられ、私たちの生活にも変化が見られてきています。今まで中止していた交流会や講演会を再開し、たくさんの方に参加していただきました。参加された方は、久しぶりに会われる方も多く、笑顔が多く見られていました。

12月に開催されたポッチャ体験会では、NPO法人障がい者スポーツクラブHIMAWARIの方にボランティアをお願いし、進行や審判をしていただきました。初めて体験される方が大半でしたが、説明がわかりやすく、14チームに分かれて沢山のゲームができました。会場が狭かったことが反省点ですが、次回は、大きな会場を用意していこうと思っています。

面談では、対面を基本として、お互いの表情が見える形での聞き取りを行いました。パーテーションはそのままで、時期を見て外していいこうと考えています。中には、リモート希望される方もいますが、要望に合わせて支援方法を選んでもら

っています。

会社訪問もリモートでの面談は減り、直接訪問する形が増えてきています。コロナ中は訪問ができなく、まだそのままになっている会社もあり、順次訪問の予定を立て、定着率の向上を図っています。

来年度に向けて

4月になると障害者雇用率が2.5%になり、その後も2.7%まで引き上げられます。このことにより障害者雇用が進むことが期待されています。

雇用率を引き上げるといことは、働き手と受け入れ企業の両方を増やしていく必要があります。働ける力や気持ちがありながらも踏み出せない方や障害者雇用に興味がありながら躊躇している地域の中小企業に対して、そっと後押しして、共に歩んでいけるようにサポートをしていきます。

(所長 白井秀明)

青梅福祉作業所

この一年、就労移行支援を通じて

青梅福祉は児童施設からの地域移行を支援していますが、今回は、児童養護施設出身の人が再就職していくことを通じて一年を振り返ります。

青梅福祉で受け入れている児童施設出身の人たちは、特別支援学校高等部を卒業すると同時に障害者グル

ープホーム(以下GH)に生活の場を移します。学校から企業就労した人は、就労移行支援事業等から就労した人と比べて就労定着にかかわる人や時間が極端に少ないというのが実情です。つまり、学校を卒業したら、ほとんど関係性ができていない人たちに囲まれて生活します。職場で緊張して、GHでも緊張して、どれだけ大きな不安に包まれているか、想像に難くありません。

昨年度の下半期に、早々と就労定着に失敗した人に対してどのように支援してよいかわからないとGHから相談がありました。その人は、不安の渦中にいて心がささくれてしまいい、部屋に閉じこもっていました。そこで、GHと協力して根気強く説得をして青梅福祉に来てもらうことになりました。職業能力が高かったので、半年後には再就職する支援計画をつくり、採用見極め実習までたどり着いたのですが不採用でした。

働く気がないとのこと、その人は、児童養護施設からです。その人は、児童養護施設の知的障害のない子たちに囲まれて育ってきたので、その子たちと比較をして、できない自分を責める日々を送っていたようです。青梅福祉でも、比較して・落ち込んで・拗ねて・荒れるという態度を繰り返して、青梅福祉との契約解除の危機を何度も迎えました。その都度、意思を確認すると就職したいとのこ

とだったので青梅福祉の作業所内実習を実施しました。それは、青梅福祉内の作業部署のすべてを経験するというものです。苦手としていた不慣れた職員から指示を体験して、時には単独で大量のウェスをたたむ作業をしました。そして、最後に本人が利用開始時よりかたくなに拒否していた部署で実習しました。そこは、最初に就労を失敗した企業と同じように本人よりも作業能力が同等もしくは上の人たちが多い給湯器を解体する部署だからです。しかし、いつの間にか拗ねてエスケープする自分がいけないことに気づいたようです。人として成長したからです。

青梅福祉の就労移行支援は特別なコースを設けません。毎日作業をする中から企業で働くことを前向きにとらえられるような経験を積み重ねて人間育成することを目指しています。その人は、再就職の失敗から一年後の三月に全国展開する巨大スーパーマーケット系列店の就職内定を勝ち取りました。

この一年の支援は青梅福祉全体で取り組み、GHなどと密接に連携して、悩み多き若者が不本意に人生の横道にそれることを阻む青梅福祉の支援の基本形でもあります。そしてそうしたことが「私も就職してみたい。」という新たな希望を生み出しています。

(所長 福田和弘)

はあとぴあ原宿

「はあとぴあ原宿のこの1年」

コロナウイルスの大流行は、利用者の生活に大きな影響を与え、コロナに翻弄された3年余りでしたが、昨年五月から、感染法上の分類が2類から5類になって、コロナ対応に区切りがついて、利用者の生活も日常生活を取り戻すことができました。

日中活動では、前年度はあとぴあ祭の玄関先の利用者の作品販売形式をモデルに、マルシェと名付けて、屋上で栽培する野菜、手作りクッキー、藍染のTシャツ、機織りマフラー、手漉き和紙葉書・ポチ袋等を並べて春先から一〜二か月に1回計8回実施しましたが、作品の販売を楽しみにしていた近隣の方々との交流が再開しました。

また、利用者の絵画等を、障がい者理解に向けたソーシャルデザインアクションプログラムで商品化を実現するシブヤフォントとの連携では、本年度ビーンズ・コネクティッド株式会社社賞を受賞し、同社の商品ラベルに採用されて、利用者の持っている力を再認識することとなりました。はあとぴあ祭は、前号で紹介したように、前年より規模を大きくして実施することができました。

生活場面では利用者の高齢化とコロナ下の運動不足、身体機能の低下が課題になりましたが、「生活リハ

ビリテーション」を意識した支援に努め、工房活動でも、身体機能を維持する運動を行い、安定した生活を送ることができました。

また、今年度、高齢化委員会を組織化して、PTや看護師などの専門職と支援職で毎月1回会議を行い、入所部門の生活空間を整え、補助具を設置し、身体機能が低下していく利用者に合わせて支援を検討して実践する取組みが始まりました。

一方、残念ながら12月早々、再開したグループ単位で行ったバスハイクをきっかけに、入所利用者と職員にコロナの感染が広がりました。前年の経験を活かし、保健所の指導、日中活動部門の応援を得て三週間かかりましたが終息させることができました。職員が一体化して取組み、通所部門に広がることなく済んで、職員の努力に感謝しています。

あっとい間に年度末を迎えますが、ウィズコロナを意識し、利用者さん一人ひとりが、安心して元気で過ごすことができるように、来年度も、職員とともに取り組んで行きたいと思っています。

(施設長 平倉秀夫)

児童部

今年度の終わりに思うこと

まもなく令和5年度も終盤に差し

掛かり、今年度の事業運営を振り返り整理をしつつ、次年度へ向けての計画や準備に取りかかっています。

今年度は新型コロナウイルスも5月8日に感染法上の分類が季節性インフルエンザと同等に移行となったことをきっかけに、徐々にコロナ禍前の生活を取り戻してきました。児童部でも、これまで感染症予防に努め、考慮してきた余暇外出時の行き先やイベント行事、地域との交流なども段階的に緩和してきました。

夏には地域の盆踊り大会が再開されたこともあり、出店をまわって、食べたり遊んだり夏風物詩を満喫しましたし、秋からは、施設でも4年ぶりに地域から活動を希望されたボランティアを受け入れ、子どもたちと関わっていただきました。

コロナ禍でも学校を通じて、様々な体験や人との関わりは続けてきたはずですが、つくづく、地域の方々との交流などから育まれる社会性や人間関係の構築といった経験の大切さを感じます。

そうしながらも、ひとたび新型コロナウイルスやインフルエンザといった感染症が施設に持ち込まれれば、瞬く間に感染は子どもたちや職員の間にも拡がり、混乱を来すことになるのです。今でもインフルエンザや新型コロナウイルスに罹患する児童がいれば職員は防護服を着用し、事の収束とそれ以上に感染を拡大させ

ない努力をしています。当然、ご家族に対しても面会の自粛のお願いやわが子と一緒に楽しんでいただけは、はたして行事への参加も控えていただくと、親と過ごす貴重な時間も失ってしまいます。

もう一つ、この時期は児童施設として一番の責務ともいえるのが、18歳を迎え高等部を卒業する児童の進路移行です。コロナ禍の4年間は施設見学や体験、実習なども思うように進まず、子どもたちの表情にもどこか心配がついて回っていました。正直、限られた選択肢しかなかった児童がいたのも事実です。今年度は、まだ通常通りとまでは行かないものの、少なからず対象となる子どもたちは希望を持ちながら見学や実習に望んでいます。

今、障害福祉の分野で「ホットワード」となっているのが「地域共生社会」という言葉です。この言葉の意味には単に地域で暮らすことではなく、「自分が希望する生活を自分で決め、地域の中で自分らしく生きる」ということと勝手に解釈しています。

次年度は、改めて子どもたちが生活の主体となって、楽しいと感じる日常と将来に向け夢や希望を持って目を輝かせられる支援に努めたいという思いを次年度に課して行きます。

(施設長 石川淳)

これまでの振り返り（第2回）

事務局長 内山 敏

Vol.14に引き続き、これまでの振り返りの第2回目である。

個別支援計画

先の措置変更児童を皮切りに中度・軽度児童が立て続けに入所してきた。送り出してから反省させられること仕切りだった、と書いたが、卒業時のイメージ（将来の生活ビジョン）を描いて廻りながらの具体的な個別プログラムが必要と感じた。この頃、月に一度、神奈川県大和市で行われていた学習会に参加していたが、そこに国立久里浜養護学校（現筑波大学附属久里浜特別支援学校）の教員がいて、文科省へ出向して個別の教育支援計画書作りをしていると教えられた。個別支援計画のことが頭にあったのでどういふものを作成しているのか質問したが、「自分で勉強しなさい」と言われてしまった。そこでテキストとして安田生命社会事業団の「個別教育・援助プラン」を購入して勉強を始めた。不確かな記憶だが、2002（平成14）年に当時の主任会議で個別支援計画の書式案を提示して2003（平成15）年から、それまでの処遇計画から個別支援計画としたのでは

なかったかと思う。この年から支援費制度が始まったが、児童の入所施設は措置制度が続いていた時期である。

初期アセスメントの項目が、大項目5つで45項目にわたり5ページ、将来の生活ビジョン（概ね3年後をイメージ）に必要な獲得するスキルと必要な支援、年度目標（援助課題）と支援方法、前期まとめ（援助課題の達成状況と後期への課題・支援方法の変更）、年間まとめ（達成状況と来年度への課題）と続き、フエースシートを入れて10ページにおよぶものだった。当初は、初期アセスメントのチェックリストを年齢別に作成しようとしており、現実を見ずに無謀なことを考えていたものだと反省させられる。

2019（令和1）年、2020（令和2）年に個別支援計画の作成に係る一連の業務が適切に実施されていなかったという不祥事が法人内の事業所においてあった。個別支援計画は、支援提供の根幹をなす極めて大事なものであり、全事業所を回る形で研修を実施した。

振り返れば、以前の処遇計画は、「できないこと」、職員が「問題行動」と思っていること」を、「できるよ」に「問題行動をなくすように」指導・訓練する計画で、しかも担当する職員が個々作成して、それがすべてであったように思う。

個別支援計画は、本人が望む生活ができるようにニーズに照らしどいうような支援が必要なのか、担当する職員のみでなく、本人を中心として支援に関わる関係者の協議を経て作成されて計画の見直しも同様に行われる。

改めて個別支援計画の大切さを考える必要がある。

井の中の蛙

させられた。施設では「横浜やまびこの里」で自主研修を受け入れていただいた。無理を言って一番大変と言われている入所ユニットと通所の班に入れていただいた。当時、何もできずに「大変」の言葉で終わらせていた自分の施設の利用者よりも大変と思われる人たちが自分なりの作業をしている姿に「目から鱗」であった。

井の中の蛙 自分が支援している利用者ほど大変な人はいない、と得てして思っていたものである。しかし、そうではないことはすぐにわかる。少なくとも同種別の施設見学くらいはすべきである。そして、人とのつながりは大きな財産である。いつまでも「井の中の蛙」でいてはいけない。

井の中の蛙（その2）

2001（平成13）年ころと記憶しているが、柘植園長（当時）から園長室に呼ばれた。「ある短期大学の先生が研究の協力員を何人か探していて、障害児関係の職員も探している。内山さん勉強になるのでやってみませんか」との話であった。期間は2年間、2か月に一度くらいの割合でその研究の会議は行われたように記憶している（かなり曖昧である）。研究テーマは虐待に関するもので、集まった施設関係職員の多くは、児童養護施設の職員であった。

この当時、入所している児童の大半は重度の知的障害に自閉症を伴う児童であり、さらに児童と言いつつ半数は高等部を卒業した人たちという状況で、児童養護施設とはまったく様相が違っていった。

そんな状況で研究協力員となり、会議に出席していくわけだが、「何？」というような会話がされたら、同じ児童の入所施設でありながら、知らないことの多さにビックリさせられたわけである。

1997(平成9)年、児童福祉法が改正され(施行は翌年)、児童養護施設は、「保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、それを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする」と規定され、それまでの「養護施設」から「児童養護施設」となっている。そして、2000(平成12)年11月に児童虐待防止法が施行されている。虐待は、正に当時のキーワードであり、研究の最適テーマであったわけである。

しかしながら、そこから蚊帳の外環境にあって自閉症支援に突き進み、視野が狭くなっていった者としては、出だしから他の研究協力員と階段が一段も二段も違っていたわけで、調査アンケートの作成、集計、分析と四苦八苦することとなった。「勉

強になるので」と言われたとおり、今思えば、大変だったが勉強となった良き2年間であった。

その後、児童養護施設や自立支援施設から措置変更による児童の受け入れが増えてくることになる。今では、障害児入所施設にも児童養護施設にも軽度の知的障害や発達障害のある児童が一定数入所しており、職員との交流ということも進めていかなければいけないのではないかと考える。また、グループホームにおいては、すでに児童養護施設の出身者を受け入れており、そこでは入居者を中心として職員間のやりとりが行われている。その意味でも「障害福祉分野のことで知っていけばよい」とはならないし、ましてや「障害児分野のことで知っていけばよい」「障害者分野のことで知っていけばよい」とはならない。文献による知識だけでなく、外に目を向けて生きた知識を吸収していくことが求められる。

この後、ある大学のセミナーにシンポジストとして出席することとなり、いくつかの学校へゲストスピーカーとして話をしに行くこととなった。人に話をするためには、自分がきちんと理解していないといけないうし、話す時間分の数倍の情報を頭に入れておかねばならない。そして、取り巻く情報は毎年更新されていくので必然的に勉強をしないと

けない。

ある大学の教授からは幾度目だったか「お上手になられましたね」と言われた。進歩していたということか。今、法人の階層別研修では、主任や副施設長が講師を担うようになってきている。毎年、ブラッシュアップをして講義内容を充実したものにしてもらいたい。

6. 年度目標(長期目標)と支援の方法		7. 障害児の生活に(関心)関わる生活者(メンバー)	
長期目標	支援の方法	関心のある生活者	必要な支援
基本的生活技能		関心のある生活者	必要な支援
社会生活技能			
その他			
目標・行動計画		目標・行動計画	

当時の個別支援計画の一部

令和五年度
寄付者御芳名

- 五十嵐清・五十嵐肇・石田健太郎・宇佐美敏郎・NPO法人にこにこ・榎戸俊行・榎戸靖宏・太田ユキ子・金子信也・金嶽憲義(株)協立防災工業(株)青和施設工業所(株)デンソール(株)リハーツ・河津英彦・木崎樹也・桐生麻里子・窪寺眞章・熊本正則・倉川かずえ・黒米博・小林弘政・小嶺勝彦・近藤尚子・坂元昌子・佐藤登美子・島崎ツル子(社団)昭和会館・白井秀明・大道正男・高山國男・柘植吉治・野口恵一・野村スエ・波多野市雄(社福)青梅なかまの会(社福)武尊会九十九園・福田和弘・三ツ橋茂男・山川勇・山本以文(有)島田銀金塗装(有)多摩自家用(有)野口商店(有)村松保険サービス・横山順子・吉岡正夫・吉岡信子・成人部保護者会(順不同・敬称略)

皆様からお寄せいただきましたご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。他にも多くの方々から、子供たちへのお菓子やおもちゃ等のたくさんのお心遣いをいただいております。心より感謝申し上げます。

地域報告
青梅マラソン応援

令和6年1月1日開設の地域交流プラザゆうあいでは1月31日にサテライトショップをプレオープンし成人部利用者の陶芸、絵画などの作品を展示しています。ご近所の方、前を通りかかった方など「ここは何の建物なの?」と立ち寄って下さる方も多くおられ、少しずつ地域の方に知っていただいている最中です。皆様もお近くにお越しの際には是非お立ち寄りください。

また2月18日の青梅マラソンではプラザゆうあい前で、すてっぷ小中尾の利用者が見学をしました。それぞれの利用者はランナーたちへ「がんばれ!」と声援を送りました。

法人報告
中里稲荷神社初午祭

友愛学園から200メートルほどのところに成木二丁目中里地区の稲荷神社があります。毎年、2月の第二日曜日に初午祭が執り行われます。新型コロナウイルス、インフルエンザの状況を鑑み、神前において祭事のみ行われました。地元の関係者の皆様とともに事務局長が参列いたしました。

代々木報告
用具寄付

デンソーソリューション様より寄付を頂きました。

パネルシアター用イーゼル
NEWソフトすのこ6枚合わせ
メッシュトンネル丸形 青・白・緑
子どもたちも大喜びです。活動の中でたくさん使わせて頂きます。
ありがとうございました。

福作報告
二十歳のお祝い

青梅福祉作業所では、今年は二人の方が二十歳を迎えました。

1月4日の新年懇親会で、二十歳を迎えた二人に利用者の会で用意された祝品を島田主任より手渡され、皆さんより祝福を受けました。二人からはそれぞれ二十歳になったことへの抱負を語ってもらい、初々しさと頼もしさが感じられました。



今は、成人年齢が十八歳になっており成人式も自治体によってさまざまな形態で催されています。それでも二十歳というひとつの区切りを青梅福祉作業所で迎えるということ、大事にすることで、大人としての振る舞いや考え方をさらに身につけていくひとつのきっかけとしてこれらの飛躍につながることを切に願っています。

編集後記

今年の冬は暖冬傾向と言われていながら東京は2月5日には雪に見舞われ法人本部のある青梅市は想定外に降り積り驚かされました。ほとんどの従業員は車通勤をしているため、本数もわずかな公共交通機関を利用したり、早めに出るなどしてこの日は通勤したようです。朝は雪かきが仕事の始まりでした。

2月も中旬に差し掛かると、うって変わって、気温も15℃を超え汗ばむばかりの、温かい日々が到来。雪の次に降ってきたのが今度は花粉。花粉症をもっている人に聞けば、明らかに例年より早いと言っていました。気温の乱高下に身体がついていけないのが正直なところですが、春が近づいていることは確かです。

法人本部のある青梅市は日本で唯一「梅」の名が付く市として名前の通り、梅の木がたくさんあります。梅の開花とともに「梅まつり」なども催され、多くの観光で賑わう季節にもなります。今年も青梅駅の程近い場所に友愛学園のサテライトショップ「プラザゆうあい」が開設されています。利用者の創った個性豊かな作品などに取って見て頂くこともできます。
最後に少し宣伝を交えさせていただきます。